

拝 心 で 生 き よ う

円 覚 南 延



拝む心で

横田管長のお話



『法華經』は、大乗仏教を代表する經典であります。内容は難しいものです。かの白隱禪師も若き日に、この『法華經』を読まれたのですが、その意味が分からずに落胆されたというほどであります。難しうえに、大部分の經典です。しかし、その精髓がわずか二十四文字に要約されるとも言われます。

それは、「我深敬汝等 不敢輕慢 所以者何 汝等皆行菩薩道 當得作佛」の二十四文字です。訓讀すると、「我深く汝等を敬う、

敢て輕慢せず。所以は何ん、汝等皆菩薩の道を行じて、當に作仏することを得べし」となります。意味は、「わたしは、あなた方を深く敬います。絶対に輕蔑しません。なぜかといいますと、あなた方は皆菩薩の道を実践して、将来は必ずや悟りを開き、仏になられるからです」というものです。

これは常不輕菩薩という方が、經典の誦誦などはせず、どんな人でも会う人ごとに、こう言つては礼拝していたというのであり

円覚343号 目次

横田管長のお話

「拝む心で」	1
管長のページ	8
信心ことはじめ④②	10
鈴木大拙の言葉と生涯(12・最終回) / 蓮沼直應	12
まさか熱中症で死ぬはずはない / 桜井竜生	16
円覚寺の至宝⑧	20
精進料理レシピ / 藤川譲治	22
みんなに親しまれる だるまさん / 横山友宏・由馨	24

表紙・裏表紙写真 / 円覚寺派宗務本所

ます。たとえ遠くにいる人々を見ても、そこへ近づいて行つては、「わたくしは、あなた方を軽んじません。あなた方は皆、仏になるのですから」と礼拝をしていました。ところがそのように言われても、不愉快に思う者もいて常不輕菩薩を罵ることもありました。それでも決して怒ることもなく礼拝を続けていました。時には杖で打ち、石を投げつけられたのでした。者もいましたが、礼拝をやめることはありました。

この菩薩の心こそが『法華経』の真髓と言われており、かの良寛さんもまた、この常不輕菩薩を心から尊敬して、「僧はただ万事はいらず常不輕菩薩の行ぞ殊勝なりける」と詠われています。

私が初めて禅寺で坐禅をしたのは、まだ小

両肘、額をつけて拝をするのです。そのお姿がなんとも恭しく神々しく尊く、身震いするような感動を覚えたのでした。

そしてさらに驚いたのはその老師が、お話を始められて、最初に仰つたことが、「今日ここにお集まりの皆さんには仏さままでります」という言葉であり、そして、皆を見渡して恭しく手を合わされて拝まれたのでした。

こんな出会いがきつかけになつて、私の一生は決まつたと言つてもよろしいかと思います。坐禅が生涯を貫くことになりました。そして坐禅で何が明らかになつたかと言えば、その時に老大師が仰せ



ます。学生の時がありました。和歌山県新宮市にある清閑院というお寺でしたが、そこに和歌山県日高郡由良町の興國寺から日黒絶海老師という方がお見えになつて、お話しくださっていました。清閑院の和尚様が丁重に頭を下げて絶海老師をお迎えなさつているお姿が印象的でした。

小学生だった私は、世の中で一番偉いのはお寺の和尚さんだと思つていたのですが、それよりももっとお偉い方がいらっしゃるのだと驚きました。

さてそうして現れたのが、実に小柄な老僧でした。老師が、ご本尊の前に進みでて、焼香をされます。その一歩一歩の歩みがなんとも言えず、力みもなく軽やかで、それでいて厳かなのでした。そして恭しく三拝されました。三度仏さまの前で五体投地といって、両膝、

になつた一言「みんな仏さまです」ということに尽きるのであります。

昨年六月に作家の神渡良平先生が『いのちを**拝む**』という本を上梓されました。たまて序文を書かせてもらいました。この本は、新潟県十日町市にあるNPO法人支援センターあんしんの話が中核となっています。

豪雪地帯でもある十日町で融雪会社を経営する樋口功さんと春代さんご夫婦の物語です。

樋口さんご夫婦は三人の娘に恵まれたのでしたが、その三番目の娘さんが、事故のために知的障がいを負ってしまうのです。

保育園に入る年齢になつても受け入れてくれるところが見つからなかつたそうなのです。

そこから幾多の苦難を経て、樋口さんご夫婦はNPO法人を立ち上げたのでした。

あんしんの理念は「障がい者にすべての人があつ通常の生活を送る権利を可能な限り保障することを基本理念にして障がい者のあらゆる行動を支援します」というものです。

トイレットペーパーの生産を事業の柱にして、百数十名の職員がはたらいているのであります。

樋口さんの長女も、母の苦労をそばで見ていてなんとか力になりたいと、社会福祉を学ばれました。海外の施設にも行き、国内でも福祉現場の実際を学ばれました。いろいろ現場で学ぶうちに、同じダウン症の子でも、支援するのがとても難しい子と、みんなにかわいがられる子がいることに気づきます。はじめはその子の性格によつて愛される子と疎まれる子があり、仕方が無いことだらうなど思つていたそうです。

ところがあるとき気がつきました。みんなに愛される子のお母さんは、その子の存在を認め、愛情たっぷりに育てているのです。逆に、対応がとても難しい子は、家族からもそ

です。ようやく入った保育園でも一月もしないうちに、「この子の面倒はみられません」と断られてしまったのでした。

母親の春代さんはこの先、三女はどうなるのだろうと不安がいっぱいになつたのでした。

春代さんは、「私とこの子がいなければ、後のみんなが幸せになれる。一人で信濃川に飛び込みたい」とまで思い詰めたそののです。



の存在を疎ましがられ、表に出せない恥ずかしい存在として扱われていたのでした。

神渡先生の「はじめに」の文章の終わりに、

「障がい者のケアの問題は、いのちを拝む以外の何物でもありません。いや、人間のいのちだけではなく、生きとし生けるもののすべてのいのちを拝むことにほかなりません。

そしてそれは私たちが先祖からずっと受け継いでいる「日本文化」のあり方でした。障がい者のケアは欧米の社会福祉のものまねではなく、「いのちを拝む」文化の発露なのです」と書かれています。

樋口さんご夫婦の我が娘への深い愛情が、「いのちを拝む」支援センターを作り上げたのでした。

神渡先生の本に序文を書いたご縁で、今

年六月に十日町で講演をさせてもらいました。その時に、初めて樋口さんの三女の方にお目にかかりました。その表情がとても素晴らしいのに感動しました。明るい笑顔でありました。どれほどまわりの方から愛されているのか、その表情からよく分かりました。本当に書かれている通りのことを実践されていることがよく分かったのでした。

神渡先生はこの本の中で「その“いのち”は心地よいと活性化し、輝きだします。人は、人から愛され守られているという実感があると、心が安らかになり、元気になるものです。暗い表情の人に寄り添つてお世話を

したたら、その人は生き生きとなり、その人の個性がますます發揮されるようになります。草花が日の光を浴びて輝きだすのと同じです」と書かれています。

あらゆる人の「いのちを拝む」、人ばかりでなくあらゆる生きとし生けるものの「いのちを拝む」ということは、宗教の理想であり、仏教や禅の極地でもあります。小学生の頃に絶海老師がお示しくださったのもこのことにはかなりません。

種田山頭火が「拝む心で生き拝む心で死なう、そこに無量の光明と生命の世界が私を待つてゐてくれるであろう、巡礼の心は私のふるさとであつた筈であるから」(『一草庵日記』)という言葉を残されています。今の時代なればこそ、「いのちを拝む」心を大事にしてゆきたいと願います。

